

先週の講壇から

「聞く・聴く・利く」

ローマの信徒への手紙 10章14節～21節

聖句「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」(10:17)

1. 《見ると聞く》 聖書を読んでいると、神さまは色々な方法で、私たち人間に働き掛けて下さっています。旅人として客となり、相撲の取り組みをしたり、天使の姿をとったり、真夜中に呼び掛けたり、夢枕に立たれたり、幻視もあります。啓示には「見る」と「聞く」、2つの信仰があるとされています。「私は見た」は強烈な体験ですが、全く他者に伝わりません。それに対して「聞いた」御言葉は伝えることが出来るのです。それ故、旧約聖書の後半は「預言書」なのです。
2. 《福音の訪れ》 現代社会では「見る」文化が中心です。ヴィジュアルに傾き過ぎています。それで「見極める力」や「見詰める心」が研ぎ澄まされるのなら結構ですが、目に鮮やかなものが溢れ過ぎて、却って、私たちは鈍感になってしまっています。詩や短歌、俳句は「読むもの」ではありません。本来「聞かれるべきもの」でした。聖書も同じです。山浦玄嗣の「ケセン語訳福音書」(ギリシア語原典から宮城県気仙地方の方言に翻訳された)をCDで聴いてみれば納得できます。聖書の御言葉と本当に出会うためには、実際に自分の足を礼拝に運ばなくてはなりません。そこで初めて、福音の言葉は、私たちの心をノックしてくれるのです。
3. 《聞くと聴く》 私たちは「聞く」ことにも鈍感になっています。医療や介護の現場には「よく見る。よく聞く。よく触れる」という鉄則があるそうです。教会生活をする者も、例外なく、この法則に従う必要があります。神さまからのメッセージをよく聴くことが出来るようになるためです。「聴く」は「耳を立てて、よく聞く」ことです。省みて、私たちは人の話を聞き流していることの、何と多いことでしょうか。あるいは「自己概念」(自分の考え方や感じ方、価値観)を相手に押し付けるだけで終わってしまっているのです。自分などは狭い見方に過ぎないのです。自分の中にあるものに、よく聴いて語ることが出来るようになると、私たちは人の話をよく聴けるようになります。そこで初めて関係が生まれるのです。それを信頼と愛情と言います。神さまの差し伸べる御手にお縋りしましょう。

朝日研一朗牧師